
科学者は魔術を夢見る

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学者は魔術を夢見る

【Nコード】

N0795S

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

修復師ウォールナットと、「バタフライ」と呼ばれるナイフ使いの少年の話。（企画投稿小説）

駆け抜けた少年がラインを越えた瞬間にあわせて彼はストップウオッチを止めた。

表示された数字を書き入れて彼は感心したように頷いた。

「十回やって平均14.22。こりゃ上出来な結果だな」

「……うー、もう駄目」

洋一は肩で息をしながらぼったりと地面に倒れ込んだ。

地面を転がって仰向けになると、彼が自分の方を覗き込んでくる姿が見えた。

彼はウォールナットと呼ばれている。

無論本名ではなく、彼が経営している修復屋の店の名前がそれなのだ。本名を名乗らず、店の名前で呼ばせている変人の彼は、国籍不明となっているが、ドイツ人のような外見をしているのだからドイツ人なのだろうと思っている。

そもそも洋一の住む‘社会’は国籍など関係がない‘裏’の世界だ。

彼はその‘裏’の技術者だった。

生まれついで才能なのだろう。手先が異常なまでに器用な彼は修復から偽造まであらゆる事をこなす。だから彼を知る多くの人間が彼を単に手先が器用なだけな人と思いこむらしいが、実際の所はそうではないと洋一は思っている。

この人は科学者なのだ。

生まれながら人一倍の探求心を持った、科学者。

だからこの人はあらゆる事に興味を持ち、そして吸収する。分析力も、計算力も、そしてそれを実現するだけの實力を持っている。

はっきり聞いたことはないが、ウォールナットを名乗る前はそんなようなことをしていたと仄めかしたことがあった。表の世界でも

多少は名の知れた人物なのだろうとも思う。

この人はどんな職業に就いていても探究者なのだ。

「ご苦労さん。いい記録だった」

声を掛けられ洋一はぽっと身を起こした。

「あ、じゃあ、もうお仕舞いですか？」

「いや、少し休んだら別の記録測定だ」

言われて少年は口を尖らせた。

「えー？ まだやるの？ オニー」

「oni？ ああ、ニホンの神話のモンスターか。俺がいつそんなものになった？」

「鬼じゃなかったら、生まれた時に額に666の数字があったんじゃないんですか？ こんなイタイケな少年を走らせ続けて記録取って酷すぎるよ。……キチクオトコ、ヒトデナシ！！ ロクデナシ！スカタン！！」

最後の下りは英語から日本語に切り替えて叫んだ。

少し顔を顰めて男はタバコに火を付けた。

「日本語はわかんねえが、最後は罵り言葉だな。自分から手伝うといった癖に文句の多い奴だ」

「だって、こんな立て続けで走らされるなんて、フツー、思わないじゃないですか。僕これ以上走ると死んじゃう」

「お前の常識では俺は異常なようだな。大体、文句が出る時点で余裕だろ。死ぬ訳ねーよ。その程度で根を上げるなよ、ちびっ子」

「僕が計るから、ウォールナットさん計ったらどうですか？」

「残念ながら俺は体力はない。いつも動いているお前ら実働部隊と俺と一緒にすんなよ」

「何で自信満々に言うかな。自慢にもならないのに」

「ついでに自慢にならない自慢だ。俺はタバコを吸うから走るのに適さない。だからお前が代理で走る方が適している。手伝うと言った以上は自身の責任だ……savvy？」

「む、ムカツク」

子供を諭すようにキザったらしい言い回しをされ、洋一は後ろにもう一度倒れた。

何が‘おわかり?’だ。

この人のことは好きだが、こう言うところが苛つく。確かに手伝うと言ったのは洋一だ。彼が何をしようとしているか興味があったのだ。だが、だからといって、こんなに無駄に走らせる必要はどこにあるのだろうか。

(あ、無駄な訳がないか。この人がそんなことする訳ないし)
何か考えがあつてのことだ。

「……お前、人は空を飛べると思うか？」

不意に聞かれ洋一は彼の方を見る。

薄い青の瞳が自分を見つめている。洋一の目の色素は本当に日本人なのかと疑われるほど薄く、北欧神話に登場する狼のようだと言われることが多い。その洋一の瞳よりも色素の薄い彼の目は澄んだ氷のようだと思った。

何万年もかけて凍った氷山の氷のような、触れれば解けてしまいそうな色をしている。

「飛行機とか、ハングライダーとかありますよ」

「自力で飛べると思うか？」

「翼が取り付けられれば。それとも傘を使って飛びますか？　メアリーみたいに？」

「人が人として、その形のままで空を自由に飛び回ることが出来ると思うか？」

「無理ですね」

瞳の奥から何かを探し出そうと覗き込むと、彼の視線も同じように戻ってきた。

この人は自分に問いかける時目を逸らしたりしない。他の人のように負けじと睨み返したりもしない。ただ、見つめ返してくる。

変な人だと思う。

そして頭のいい人だと思う。少なくとも、洋一が自分よりも頭が

いいと感じたのは彼が初めてだ。

人付き合いは酷く不器用だと思っけれど。

「魔法でも使わないとピーターパンにはなれない。それとも魔法の粉でも使ってみます？　気分だけなら空を飛べるかもしれませんが。脳科学的に」

「Arschloch. そんなクレイジーな趣味はねえよ」

とても上品とは言えないドイツ語と共にタバコの煙と一緒に吐き出す。

「何でそんな質問を？　空を飛びたいんですか？」

「俺じゃない。飛びたがった奴がいただけだ」

過去形だと言うことはその人はもう彼の側にはいない。

妙な感傷を感じて、洋一は慌てて話を変える。

突っ込んで聞かない辺り、自分らしくないと思いながら。

「まさか今回の実験、それだとか言わないですよね？」

「だったらどうする？」

彼の口元に微笑が浮かんだのですぐにそれが冗談だと気付くが、彼の態度が少し苛立った。

むっとして、そんな自分がおかしくて吹き出す。

どうも自分はこの人という調子が狂ってしまうようだ。

彼が頭のいい男だから変に気を張った所で心の奥を見抜かれてしまう。そうである以上、気を張る必要がないからこの人の前では素直になってしまうのかもしれない。

「今回の‘実験’は別件だ。俺は魔術師になりたいわけじゃない」

「分かってます。でも夢見るくらい、いいと思いますよ。あなたは夢を見るの苦手そうだけど」

「それ、昔、他の奴にも言われたよ」

彼は本当に夢を見るのが苦手だろうと思う。

彼は自分と似ている。

だから分かる。

未来を悲観して諦めている訳ではない。彼に出来ることは夢を見

る前に彼は実現させてしまうだろう。実行に移せば夢は夢ではなくなる。成就できるか出来ないかの現実が変わってしまう。だから彼は夢を見ることをしない。

ただ、実現できないと知っていることを、いつか出来るのではと夢見ることが苦手なのだ。

けれど本当は期待をしている。現実を起こり得ない魔術のような奇跡が起こることを。

「その人、何で空飛びたいなんて言ったのかな」

「魔法使いだったんだよ、そいつ」

「魔法使い？」

現実になんかある訳がない。おそらく比喩的なものだと思う。

「俺には出来ないことをやってのけた。何にも出来ない癖に、何でも出来る奴だった」

矛盾しているような言葉を吐き出して彼はタバコの煙も吐き出した。

「そいつが空だけは飛べなかった。飛ぶ前に打ち落とされた」
空を飛ぶ。

そのの意味することが分かって洋一は目を伏せる。

彼がどんなことをして生きて生きたのか、その人が誰なのかは分からない。ただ、自由に生きようとして、そうなりきれず死んでしまった。おそらく、誰かに殺されてしまったのだ。

「……ウォールナットさんは、人間が空飛べると思ってますか？」

「さあな。ハゲタカにでも聞いてみな」

「じゃあそのハゲタカはどこで聞いたのさ」

定型句で返されたのにむっとして、洋一は口を尖らせて明後日の方向を向く。

その視界の端で彼が見たこともない優しい顔で微笑んだように見えて洋一は彼を見返した。

気のせいだったのだろうか。

彼は見返してきた洋一を不思議そうに見返していた。

「何だ？」

「ううん、何でもない」

言ってから洋一は付け加える。

「その人、今は飛んでいるといいですね」

嫌味のつもりではない。純粹にそう言うのと、彼は少し自嘲するよ
うに笑った。

「……そうだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0795s/>

科学者は魔術を夢見る

2011年3月31日13時55分発行